



タイ (TITF) のステージで協議会のPRをしています。(後ろの画面の人物は関係ありません。)

白川郷の合掌造り

第 13 号

平成23年3月31日

発行 (財)世界遺産白川郷
合掌造り保存財団
岐阜県大野郡白川村荻町
2495番地の3

平成22年度に日本を訪れた外国人観光客は、過去最高の86万1千2千人を記録しました。(日本政府観光局調べ) そのうち、白川村を訪れた外国人観光客は10万9千人(団体客+宿泊者)で日本を訪れた外国人観光客の1.2%が白川村を訪れたことになりました。(参考 高山市18万7千人(宿泊者ベース)、飛騨市5千3百人)

国別のシェアとしては、全国で韓国が28.3%で第1位、中国が16.4%で第2位、台湾が14.7%で第3位であるのに対して、白川

白川郷を訪れる外国人観光客について

白川村産業課
商工観光係長 古田直樹

村では、台湾が55%で第1位、中国が8.5%で第2位、韓国が7.7%で第3位となっており、圧倒的に台湾人の入り込みが多いことが分かります。(日本全国で126万8千人の入込みのうち、白川村へは5万8千人なので訪日台湾人の45%が白川村を訪れていることとなります)

村では平成22年度に広域観光協議会や岐阜県のプロモーションにより韓国、シンガポール・マレーシア、タイへ宣伝活動に出ております。韓国へは飛騨地域観光協議会の宣伝事業(高山市・下呂市・飛騨市・白川村)で6月2〜5日、シンガポール・マレーシアへは岐阜県の観光プロモーション事業で8月2〜7日、タイへは高山・松本・金沢・白川郷誘客協議会の宣伝事業で2月21日〜28日まで職員が出掛け、白川村のPRに行っていました。

その中で、私が出掛けた2事業(シンガポール・マレーシア、タイ)について、雑感を述べさせていただきます。ちなみに平成22年度はシンガポールからは約3千人、マレーシアからは約300人、タイからは約6千人のお客様が白川郷を訪れております。私自身、専門学校時代(20数年前?) 以来の外国行きと大の飛行機嫌いということもあり、非常に不安を抱えた中でスタートでしたが、7時間ほどのフライトで無事シンガポールに到着しました。岐阜県主催のプロモーションということもあり、空いている時間は旅行者廻り、昼食・夕食時は、旅行者との食事会というとてもハードな日程でしたが、シンガポール・マレーシアの方々に白川村をPRするよい機会になりました。帰国後は、早速、個人客が中部国際空港から英語のナビ付きのレンタカーを駆使して白川村入りするツアーを組んで下さる旅行会社や小松空港経由で、荻町の民宿に宿泊するツアー(東日本大震災の影響

(前頁より)



ですべてキャンセルになってしまいました(が...)など少しずつ成果が見え始めてきていると感じております。タイには2月21日から28日までTITF(タイ・インターナショナル・トラベル・フェア)に松本・高山・金沢・白川郷の協議会でブースを設置するために行ききました。感じたことは、タイの方は旅行計画を綿密に立てる方が多く、このような機会をとらえて目的地のブースを訪問して質問されるようで、高山及び金沢からのバス時刻を聞かれたり、遠くは中部国際空港からの道のりを聞かれたりと非常に細かい質問が多く驚きました。実際に白川郷の民宿十右エ門さん)に泊まって非常によかつ

たですなどの生の声も多く聞くことができ、すごくうれしかったです。また、先日お客様を案内するためにせせらぎ駐車場まで人を待つていた際に、タイ人から声をかけられ、片言の英語で少し会話をしましたが、2月にタイであなたの顔を見ましたと言われ、実際にブースで対応した方が白川郷へ来て下さるのを実感し、感激して思わずようこそお越しくださいましたと握手をしてみました。村では、訪日外国人に対し、総合パンフレットの日英併記や荻町マップの多言語語化、荻町地内看板の多言語語化などの事業を進めてまいりましたが、本年3月には、国交省中部運輸局の事業により、せせらぎ公園エリアでの多言語語化による看板整備を実施しました。23年度事業では、海外に白川村を売り込むためのDVD(多言語化)を作成し、プレゼンテーションでの利用や、白川村を訪れた旅行者等に配布します。

また、総合パンフレットについても日英併記のものを英語版にするなど対応を予定しております。また、外国人のお客様の急病対策についても、多言語版で病気などの状態が分かる資料を商工観光係(組合等の総会で随時配布しております。)で持つておりますので、お気軽にお問い合わせ下さいませようよろしくおねがいします。東日本

年	中国	香港	韓国	台湾	アジア他	フランス	イタリア	ヨーロッパ他	アメリカ	オーストラリア	その他	計
17年	520	-	1,600	44,400	700	160	200	900	950	0	570	50,000
18年	920	-	4,090	66,040	2,650	170	380	1,730	2,570	160	290	79,000
19年	2,270	60	7,030	93,290	7,280	600	780	2,610	3,360	310	1,770	119,300
20年	4,500	80	7,230	93,780	7,150	1,320	690	3,400	2,990	520	1,720	123,300
21年	8,220	80	1,870	46,450	7,840	880	870	2,700	1,600	530	1,440	72,400
22年	8,830	5,230	7,980	57,840	12,930	600	1,190	4,400	2,490	870	1,740	104,100

表1:国別外国人来訪者数

大震災の影響で、3月11日以降、日本はもとより白川村を訪れる外国人観光客は激減しておりますが、先般、台湾からメディア・旅行者の御一行様(32名)が高山祭り経由で、飛騨地域



の安全を本国でアピールしていただくべくお越し下さいました。皆様非常に熱心な方が多く、集落内で沢山の写真を撮って下さっており、今頃は新聞雑誌等で白川郷の写真が出ていることと思えます。いずれにしろ、日本への渡航制限を解除する国々も多くなってくるのが予想され、海外からのお客様も徐々に回復してくると思えます。今まで以上に私達案内するほうも当然のことながら、事業者の皆様方も「ようこそ白川村へ来て下さった」の感謝の心でお客様に接していただくようお願いいたしました私の寄稿を終了させていただきます。

平成22年度文化財修理報告

文化財専門設計監理技師 松本継太

板谷峰止家 伝建No.80

建物の規模

桁行	17.4 m
梁間	11.3 m
建築面積	227.8 m ²



図1：竣工東北側(手前二間分が復原部分)

板谷家は平成21年12月から2カ年の事業で平成22年12月完成を迎えた。昨年度の会報で板谷家の破損調査の内容や修理方針、建物の向きを変え

る理由等を中心に報告させていただいた。今回はその続きとして板谷家の復原の内容について詳しく報告したい。

柱位置の検討

前回の会報でもお伝えしたが板谷家は昭和46年移築当時合掌造り本屋のマヤ・ミンジャ部分の二間分を撤去して新たに落屋で同規模の土間部分を建築した。今回の修理ではこの二間分のトタン屋根の落屋を撤去して加須良にあった頃のようなマヤ・ミンジャ部分の復原を行った。

当時の部材は転用されたチョウナ梁以外残っていないので全て新材で作らなければならない。復原にあたってまず問題になるのはそれぞれの柱の位置である。移築前に板谷家が建っていた加須良集落に建物の礎石が残っていないか確認に行ったが、残念ながら復原部分の礎石は発見できなかった。したがって移築前の古写真と現存建物に残る痕跡から柱位置の推定を行った。

ウシノマヤ・ニワの柱位置

まず古写真(図2)を見て特に注目すべき点は棟通りに入るべき柱が正面側に少しずれているという点である。図3の「11通り・と柱」の下手側を見ても壁の痕跡は無いため、ウシノマヤ・ニワ境の間仕切りは現存本屋のロジバタ・オオヒロマ境の間仕切りよりも正面側に喰い違った位置にあったことがわかった。また、11通り「わーぬ間」「ぬーと間」の差し鴨居にはそれぞれ中段梁が取りついていた痕があるため、その下手にはその梁を受ける柱があったと判断できる。よって13通りの「る柱」「ち柱」の位置はその中段梁の痕跡の位置によって決定した。よってウシノマヤ・ニワ境の間仕切りの位置は「るーち柱間」の寸法を踏襲して決定した。

ドジ・ウシノマヤ境の柱位置

古写真(図2)をよく見るとドジ・ウシノマヤ境の柱も現存本屋の又首の載っている柱筋と喰い違っていることがわかる。写真では又首尻の載っている位置から背面側に少しずれた



図2：昭和40年代出村家時代(下手側面)

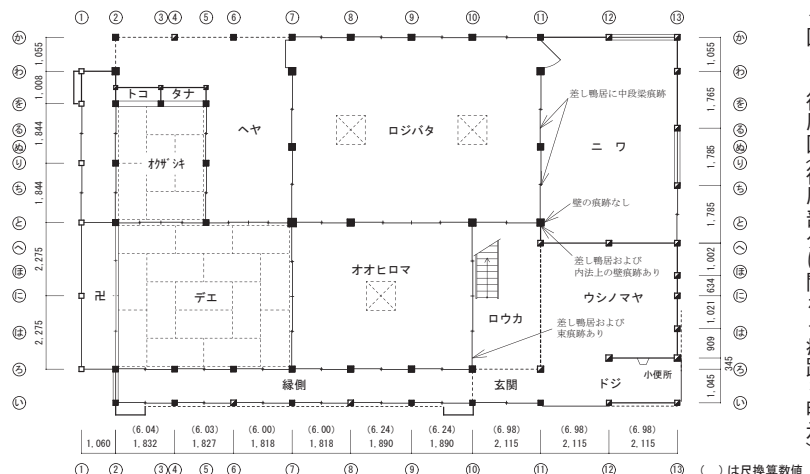


図3：復原図(復原部分に関わる痕跡を明示)

()は尺換算数値



図4：旧西岡家のウシノマヤ・ドジ境部分の曲がり梁

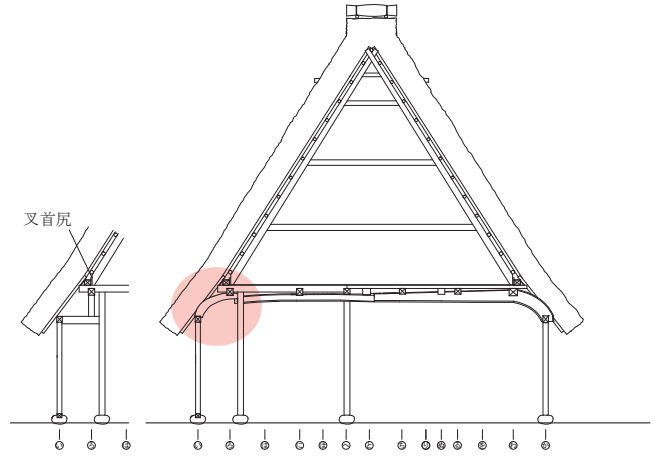


図5：12通り断面図(右が旧西岡家を参考にした竣工断面図)

位置に柱を立て、そこから差し鴨居を正面側の下屋柱に渡してその上に束を立てて又首を受けている。通常の合掌造りの場合、又首の下に柱を建てて直接屋根荷重を受けるので板谷家のこの構造は珍しい。現存部分の10通り「とーる間」に入っている差し鴨居には通りの柱通りから背面側に1.1尺ずれた位置に中段梁の痕跡とその上に架けられる桁行きの梁を受ける束の痕跡が確認できたのでこの通りがウシノマヤ・ドジ境の間仕切り位置であることがわかった。

この場合、素直に考えると図5の左のような構造によって又首尻を支えることになるが、板谷家のような又首尻の載っている位置から背面側に少しずれた位置に柱を立てている類例が他にも無いか調べたところ、同じ加須良にあった民家で現在高山市の「飛驒の里」に移築されている旧西岡家が板谷家と同じような柱配置であった。旧西岡家の同じ部分の構造を確認すると図4のような曲がり梁を使って受けていたことがわかった。よって板谷家も同様の工法とすることとした。

復元二間分の柱間寸法

ウシノマヤの桁行の柱間寸法は類別調査及び聞き取り調査、古写真より決定した。現存する部分の桁行の柱割計

画寸法を見ていく。上手から順にデエが6尺4分・6尺3分・6尺の3間で、5尺8寸×2尺9寸畳の入る畳割で計画され、オオヒロマが6尺、6尺2寸4分、6尺2寸4分の3間で柱真々制で計画されている。玄関部分は他の柱間よりも広い6尺9寸8分となっている。正面側から撮影された古写真を確認すると復元する部分のウシノマヤの柱間は玄関部分と同規模の柱間のように見える。前所有者の出村繁義氏によるとウシノマヤの入口とその下手の間は柱間が他の部分よりも広がったそうである。

加須良の他の現存民家の柱間を確認してみると、旧中野義盛家と旧山本藤次郎家、旧西岡教善家が同じように玄関から下手の3間が他の柱間よりも間延びしておりおよそ7尺間となっている。以上のことから板谷家の復元部分二間の柱間は玄関部分の柱間6尺9寸8分を踏襲することとした。

転用されていたニワのチョウナ梁

修理前の11通りには「とーい間」にチョウナ梁が架けられていた。このチョウナ梁は、もともとニワの12通りに架けられていた梁を転用したものと考えられる。理由としてはまず間仕切筋である11通りにはチョウナ梁が架けられるようなことは無いことと、ニワ

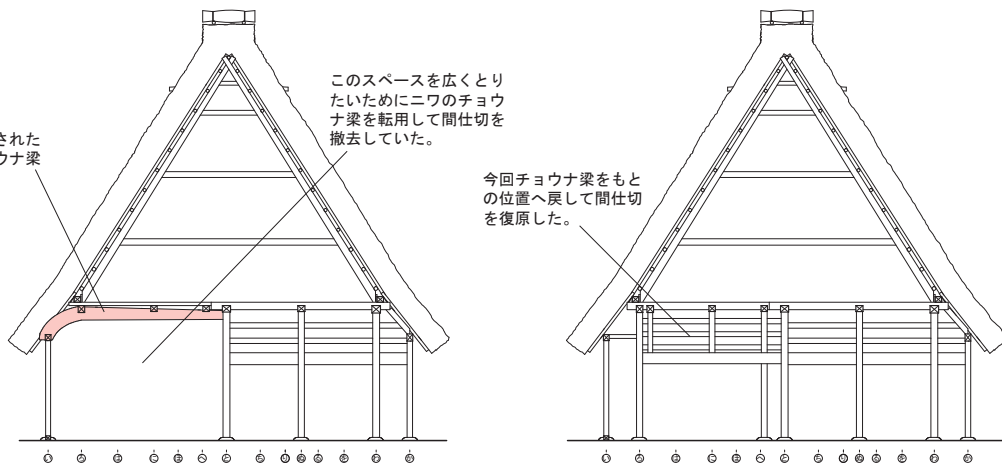


図6：11通り断面図

修理前

修理後(復元)



図7：修理前下手側(手前の二間が移築時に建て替えられたトタン落屋)



図8：修理後下手側(手前二間が復原部分)



図9：昭和40年代下手側(手前二間が移築時に撤去された。)



図10：昭和40年代上手側

図11：本覚寺からの景観

の12通りはチョウナ梁を架けなければ、「12一わ」の位置に柱を立てなければならなくなるからである。チョウナ梁とは根本が曲がった部分を利用して本屋の桁行の梁よりも一段低い下屋の桁に根本部分を架けて、上屋柱を抜き、下屋を本屋に取り入れるために架けられる梁の事を言う。

ようするに加須良からの移築時にオヒロマ・ロウカ・新築する落屋部分を土間使用にして広いスペースとするために二ワに架けられていたチョウナ梁を11通りに架けて二本の柱を撤去したのである。よって今回は11通りに建築当初の間仕切りを復原し、チョウナ

梁をもとの位置である二ワの12通り「かーと間」に架け直した。

移築の合掌造り

板谷家のような移築の合掌造りは荻町の中にも結構ある。このような移築は昭和20年代から40年代のダム建設と日本の高度経済成長の時期に頻繁に行われた。特に板谷家のあった加須良集落は昭和46年に集団離村をして廃村となった集落で、集落のほとんどの家屋が移築され今もなお保存されている。板谷家の場合、村内の荻町に移築されたが、この頃の移築は全国規模で行われ、遠いところでは阿蘇山の麓や、四

国、東京都内など県外に移築されたものは35棟確認されている。現在、県外に移築された合掌造りの保存状況と現存合掌造り民家の類例資料整備を目的とした調査を現地を訪れて行なっているが、現地へ行って驚くのはどの合掌造りも立派なものばかりであるということである。白川村での役目を終えた合掌造りたちの第二の人生は様々で、民家園などの野外博物館施設で保存展示されているものや、レストランや式場、コテージ等営業施設となったものも結構ある。しかし、中には営業施設としての役目も終え、活用されずに空屋状態のものも結構ある。空屋となっ

てしまえば朽ちていくのを待つばかりだ。

板谷家は運よく現当主のお父さんである峰止さんに目をかけられ荻町のど真ん中にやってきた。しかし、その時の事情でまわりと違った方を向いて建ててしまった。今回の修理で、ようやく他のみんなと同じ方向を向くことができ、加須良にあった頃の姿に戻ることもできた。今後も御当主に大切にされていくことと思う。



茅葺き文化協会理事 安藤邦廣先生

平成二十二年度保存会育成事業は六月二十六・二十七日に南砺市で行われた第一回茅葺きフォーラムに参加させていただきました。今回の参加者は教育委員会、財団事務局あわせて十三名となりました。今回のフォーラムはこれまで(財)日本ナショナルトラストによって運営されてきた全国茅葺き民家保存活用ネットワーク協議会が、一般社団法人日本茅葺き文化協会として法

自治保存会育成事業

第一回茅葺きフォーラムに参加しました

人化されたことをうけ、設立記念として「茅葺きの暮らしと生業」を全体テーマに開催されました。二日間にわたるスケジュールでしたが、二日目の相倉合掌集落見学会は有志の方のみが参加され、私たちは初日に平行政センターで行われた日本茅葺き文化協会設立総会、茅葺きフォーラム、夕食を兼ねた情報交換会に参加させていただきました。

設立総会と茅葺きフォーラム

一般社団法人日本茅葺き文化協会は平成二十二年、茅葺きの文化と技術の継承と振興をはかり日本文化と地域社会の発展に資することを目的に設立されました。理事のメンバーとして財団の松本設計監理技士も参画しています。まず行われた設立総会では理事の紹介や事業報告等がなされ、その後茅葺きフォーラムに移りました。開会に際しては、谷口村長が来賓祝辞を述べられました。プログラムはまず開催地である南砺市相倉、菅沼集落の報告、「いろりを復活しよう」「茅葺きは地場



屋根葺師さんの事例報告

産業になるか」をそれぞれテーマにした日本各地の様々な取り組みについての報告とディスカッションが行われました。参加者は全国の茅葺き民家で生活、保存している個人や団体の方をはじめとして、茅葺き民家の維持に携わる業者、研究者、学生など多岐にわたり、闊達な意見が交わされました。白川郷荻町集落の自然環境を守る会や(有)白川郷かや屋根技術舎の立場で参加した皆さんは、いわば茅葺き民家に携わる先進者としていっそう多くの意見を求められていました。

情報交換会

夕刻からは場所を変えて夕食兼情報交換会となりました。南砺市の方々の

ご尽力により、おいしい料理が提供される中、他地域の人々と忌憚のない意見交換の場がもたれました。茅葺き民家を保存し生活スタイルを後世につなげてゆくことは決して楽なことではありません。しかし全国に同じ問題を共有し立ち向かっていく人々がこんなに多くいること、それを確認できただけでも有意義だったと思います。最後に今回参加した茅葺きに携わる団体のなかで特に若い世代の技術者、研究者が次々と紹介され、それぞれ抱負を述べていきました。価値観が多様化した今の日本にあつて、少数派と思われる進路をあえて選んだ若い人たちを心から応援したいと思い、そのためにも彼らが働きやすい環境を整えていくことが私たちの使命ではないでしょうか。



交流会の様子

合掌造り民家耐震性能調査報告

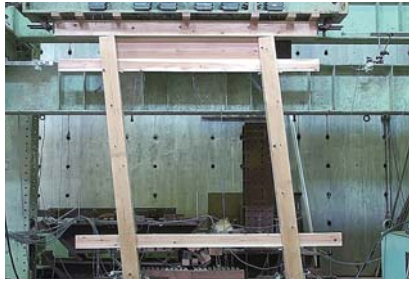


図1 試験体B(最大変形時)

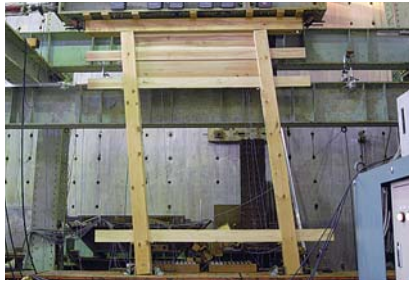


図2 試験体C(最大変形時)



図3 試験体I(最大変形時)



図4 試験体H(最大変形時)



図5 試験体A(最大変形時)

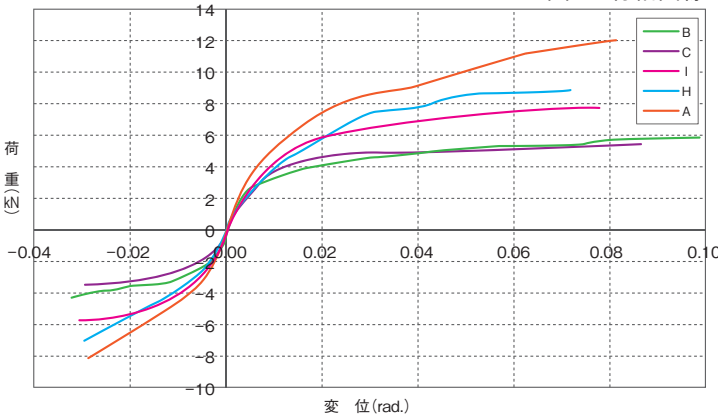


図6 骨格曲線

昨年度は合掌造り民家の揺れ方の傾向を知るための「常時微動計測調査」を行いました。今年度は合掌造りの壁面がどのような耐力を持っているのかを調べる実験を行いました。合掌造りの壁は板壁が基本ですが、合掌造りの壁の耐震性能に関する研究は今まで行われていませんでした。しかし、合掌造りのような文化財建造物の耐震評価をする場合、まずは建物の持つ耐震性能を把握する必要があります。建物もともと持つ耐震性能を正確に把握することで的確な評価を行うことができます。

今回はこれらの壁がどのような耐震性能を持っているのかを把握するために実物大のモデルを作成して静加力実験を行いました。実験及び調査研究は東京大学生産技術研究所腰原研究室と、大成建設株式会社の歴史環境基金の支援をいただいております。

実験方法

まずは合掌造りの一般的な壁面モデルを5体作成しました。各モデルは荻町地区の合掌造りの各建物の壁面構造の大きな統計をとり、今後耐震診断を行う際にデータとして活用しやすいような標準的なモデル作成に努めました。桁行方向で一番屋根荷重がかかる又首が載る通りの壁面モデルや、マヤ

実験結果

試験体5体のいずれも最大変形(10分の1rad)まで柱や貫の折損が発生せず、粘り強い挙動を示しました。(図1~図5)この実験によって合掌造りの壁面がどの程度の変形(変形角)がされるのかということが定量的に把握

周辺の豎板壁のモデル、梁間の部屋境(特にアイ・オエ境部分)部分の差し鴨居を主体にしたモデルを荻町の大工組合に作成していただきました。モデルは一度村内で仮組みした後、解体し東京大学の千葉県の試験場に運搬後、現地で大工さんに組み上げてもらうという工程で準備を進めました。試験は試験体の頂部に鉛のおもりを固定した鉄骨の梁を設置し、その梁を油圧ジャッキで水平方向に押し引きすることで試験体に力を加えて試験体の変形を計測しました。

することができました。(図6)試験体全体的には大変形時でも緩やかに耐力が上昇していることが確認され、合掌造りの板壁の場合は壁の端部が柱等の軸組にめり込むことにより荷重に抵抗し、粘り強い構造をつくりだしていることがわかりました。今後の課題としては合掌造りの柱で使われることが多いヒメコマツ材の材料特性の調査や合掌造りの模型の振動台実験等が必要で、今回の実験結果と併せてより的確な耐震診断が行えるよう、データを蓄積していこうと思えます。

せせらぎ公園小呂駐車場 平成二十二年度の入込み

平成二十二年度せせらぎ駐車場の入込みは昨年度を大幅に下回りました。普通車は約二万台減(前年比七十九%)、バスは約千六百台減(同九十三%)。東海北陸自動車道が全線開通した平成二十年をピークに普通車は徐々に減少、バスも今年度減少に転じました。長く続く不況の中、観光業は軒並み痛手を受けておりますが、白川郷も高速道効果で一時的に上向きだったとはいえ、その影響から逃れることはできなかつたのでしょうか。

せせらぎ駐車場への普通車の入場が減少した原因はそのほかにも幾つか考えられます。民間の駐車場が周辺に増加したことも無関係ではありません。駐車場料金の一部は世界遺産協力費として、世界遺産集落保存のために使われています。このまま駐車場の収益が減少することは、集落を保存してゆくための体力を失うことですから、早急な対策が必要です。

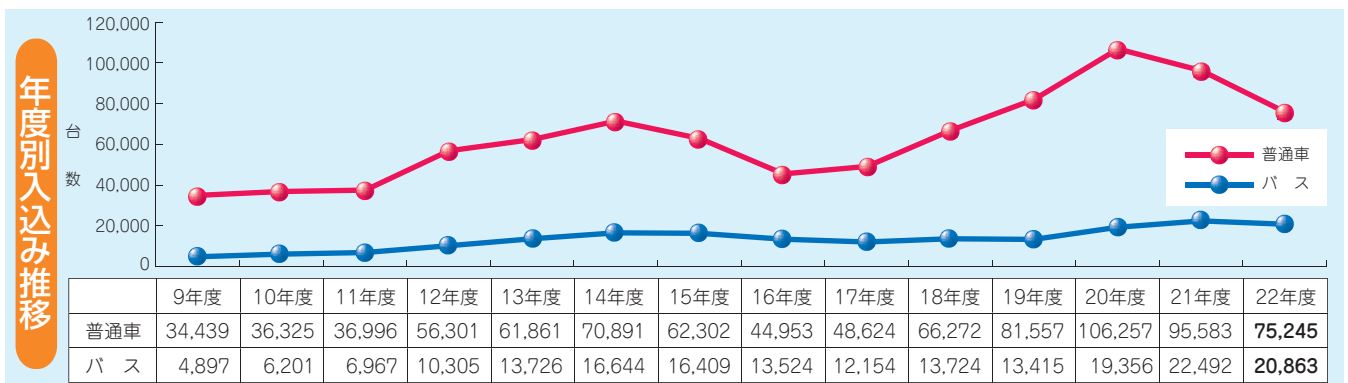
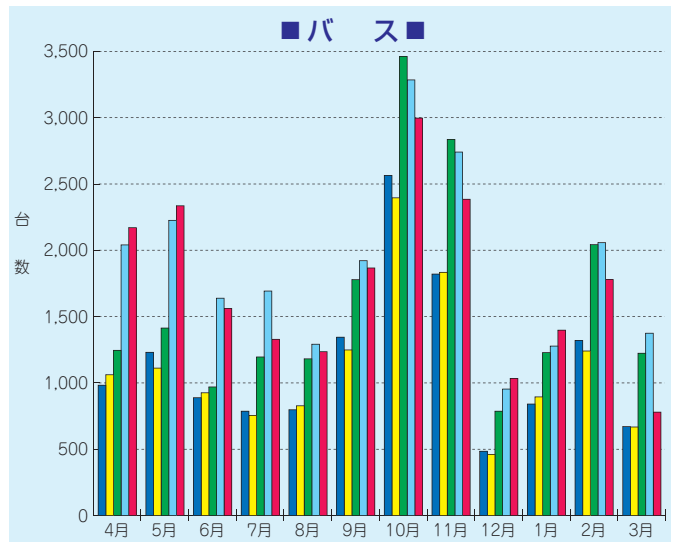
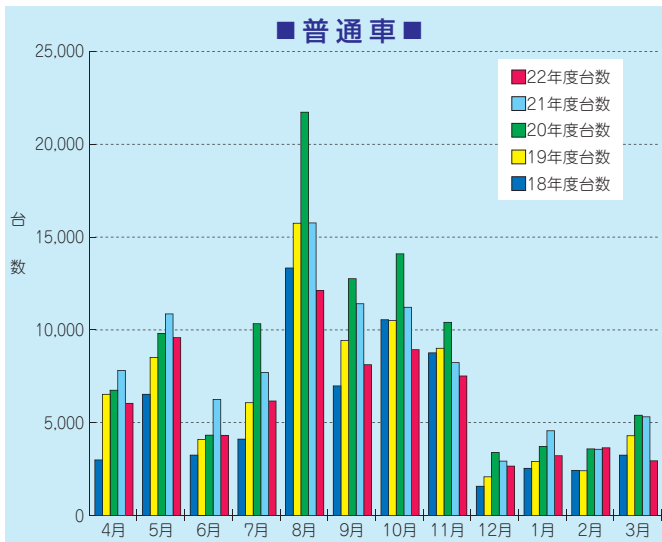
平成二十二年度にはこれまで混雑時に臨時に運用を行ってきた寺尾駐車場が大々的な整備を経て本格的に稼働いたしました。財団は白川村との間で、せせらぎ駐車場と同様の指定管理者契約を結び、混雑すると予想される日に

限って運営を行いました。今年度準備をした日は三十一日、内、実際に営業を行った日は十七日でした。あくまで新交通システム実施調査を基にした混雑時の渋滞緩和が目的であり、収益を望める駐車場ではありません。集落保存事業の一環として経費代を捻出している状況です。しかしシャトルバスの運行や警備員の配置など再検討を重ねて少しでも経費を抑える努力を考えたいと思います。

さて駐車場の統計を算出している最中に東日本大震災が発生致しました。被災された皆様に対しまして深くお見舞い申し上げます。

このような状況下で駐車場の入込について検討するのは大変申し訳ないのですが、平成二十三年度はとても厳しいと言わざるを得ません。経済の停滞は復興の妨げであり、娯楽、観光など普段通りに行くべきという意見も出てきておりますが、私どもとしては、唯、被災地域の復興と、被災者の痛みが癒される日が少しでも早く訪れることをお祈りするのみです。日本中が落ち着きを取り戻し、人々の心にゆとりが生まれた時には、喜んで皆様をお迎えしたいと思います。

平成18~22年度 せせらぎ公園小呂駐車場月別入込み台数比較



年度別入込み推移

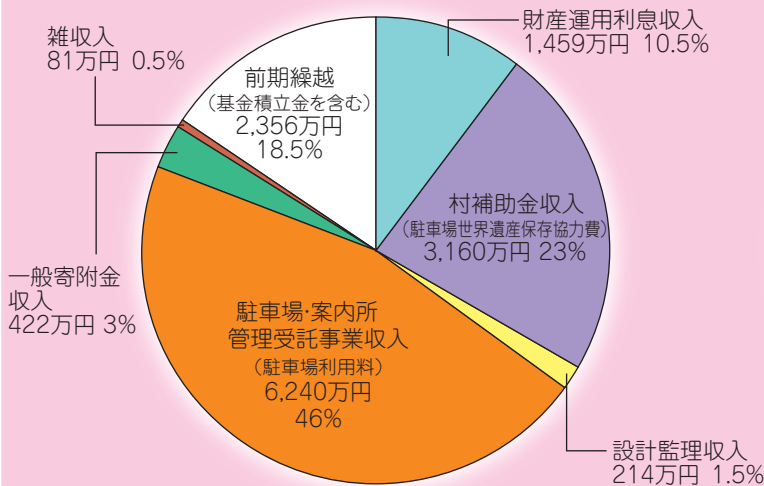
…財団法人世界遺産白川郷合掌造り保存財団…

平成22年度

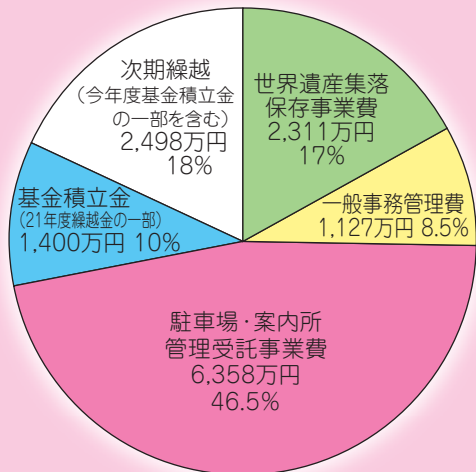
会計のあらまし

財団が、どのような収入を得て、どのように支出しているのか、平成22年度の会計状況をお伝えします。

歳入1億3,694万円



歳出1億3,694万円



平成22年度の主な事業

1. 修理事業		7,849,000円
差し茅	9棟	2,016,000円
伝統的建造物修理	釈迦堂	215,000円
棟茅葺替	94棟	5,320,000円
トタン屋根葺替	4棟	298,000円
2. 修景事業		5,114,485円
修景協力費助成	16棟	2,603,000円
トタン屋根葺替	7棟	1,859,000円
ビニールシート指定色奨励事業	52枚	259,520円
一般建築物茅屋根補修	4棟	169,000円
オダレ助成	33枚	223,965円
3. 地域活性化事業		1,076,586円
自治保存会活動費助成		700,000円
自治保存会育成事業		300,000円
人材育成事業	南砺市	76,586円
4. 調査普及事業		7,534,502円
新交通システムの実施調査		6,160,410円
合掌造り民家耐震性能調査		1,374,092円
5. 水田復旧事業		1,005,017円
耕作放棄地の復旧	水田48.5a、畑0.7a	426,473円
耕作放棄地の復旧支援		578,544円

合計 22,579,590円

財源内訳

県補助金	2,000,000円
村補助金	18,600,000円
大成建設補助金	1,000,000円
基金運用利息	979,590円

合計 22,579,590円

財団が受託管理運営しているせせらぎ公園及び駐車場では利用客から駐車場利用料（普通車300円・大型車2,000円）、世界遺産保存協力費（普通車200円・大型車1,000円）の二種類を徴収しています。これらの収入は財団からすべて村に収められます。

そのうち駐車場利用料はせせらぎ公園及び駐車場の維持管理費に当てられ、一部は駐車場・案内所管理受託事業費として財団の歳入となります。世界遺産保存協力費は世界遺産地区の保存のために使われます。こちら一部が村から事業及び運営費補助金として財団に入ります。これは財団の主目的である世界遺産集落保存事業を遂行するための大切な収入源となっております。平成22年度のせせらぎ公園小呂駐車場の総収入は、普通車、バス共に減少、駐車場利用料約6,328万円（931万円減）、世界遺産保存協力費約3,591万円（570万円減）となりました。その内財団では駐車場、案内所管理受託事業費として6,240万円、事業及び運営費補助金として3,160万円を村からの収入として活用させていただきました。

財団が保有する基金は約6億3,439万円、22年度は1,459万円の利息となりました。財団の貴重な自主財源として集落保存事業を中心に活用しています。

財団が保持している基金の現在額(平成23年3月)

基本財産	302,361,000円
運用財産	332,034,160円
合計	634,395,160円

ありがとうございます 募金ご協力者一覧 (敬称略)

平成22年度

福岡県	野中利郎	香川県	柴田 聰
愛知県	森 顕敏 大森國雄	岐阜県	(株)三輪酒造 松井美子 牛若丸三弦会 (有)かたりべ・大谷昭二 早川寛雄 早川美和子 松井 實 (有)高山観光写真 (株)セディナ・岐阜支店
東京都	(財)ラーニッポン 大野泰正	三重県	紺野圭子
神奈川県	小野 剛 藤田宏子 北村秀雄 鈴木久司	滋賀県	(株)文教スタジオ・一園泰成
埼玉県	細谷恵子 三田和巳・由美子	岡山県	若藤貴春
長野県	丸山初子 (オレンジの会)	兵庫県	西本照也
和歌山県	石田真紀	徳島県	北西洋介
千葉県	イオンリテール(株)		

竹筒募金

白川村役場/国重文 和田家/ふる郷 長瀬家/神田家/明善寺郷土館/民宿 十右エ門/民宿 ふるさと/民宿 久松/民宿 利兵衛/民宿 幸エ門/民宿 源作/民宿 太田屋/民宿 よきち/民宿 伊三郎/民宿 のだにや/民宿 志みづ/民宿 かんじゃ/トヨタ白川郷自然学校/民宿 わだや/旅館 城山館/土産 こびき屋/土産 おけさ/土産 山楽堂/土産 しやくなげ/土産 今藤商店/土産 白楽/土産 山峡の家/食事 基太の庄/文化喫茶郷愁/食事 合掌庵/見学 合掌造り民家園/土産 古太神/食事 合掌森崎/焰仁 美術館/土産 元気な野菜館/団子 いさなみ/食事 喫茶狩人/土産 恵びすや/土産 おいしんぼ/食事 喫茶今昔/白川郷の湯/食事 いろり/民宿 やまもと/たなか屋/土産 ぜん助/食事 手打ちそば処 乃むら/喫茶 さとう/鳩谷郵便局/土産 道の駅白川郷/食事 白水園/食事 飛騨路/食事 ます園文助/城山 天守閣/食事 与ぜ/お食事処 忠兵衛/食事 しらおぎ/喫茶 鄙/あらい食堂/食事 味処ゆきんこ/団子 ちとせ/白川郷観光協会/総合案内であいの館/いっぷく ちな/盛善

世界遺産白川郷合掌集落保存基金にご理解とご協力を

合掌財団では世界遺産集落の景観保護を行うため、合掌造り家屋の修理に対する助成や合掌造りを取り巻く全ての建物が農村風景に影響を与えないような修景に対する助成等を中心に、集落に暮らす住民の生活により密着した事業展開を心がけております。

それらの経費を賄うには、合掌財団のわずかな基本財産の運用益だけでははるかに及ばないのが現状です。現在はそれを補う窮余の策として岐阜

県の助成を得て、白川村が緊縮財政の中から捻出しています。今後の社会情勢の変化に伴い、合掌財団に対して要請される事業がますます多様化していくものと予想されます。合掌財団がこのような課題にできるだけすみやかに、的確に対処していくためには基本財産をより充実させ、運用できる果実をもっともっと増やさなくてはなりません。どうか合掌財団の趣旨にご賛同くださり、皆様の暖かいご支援、ご協力をお願いします。

振替による場合

基金に対する
ご寄付お送り先
及び資料請求先

- ・郵便振替口座 00810-6-51954
- ・飛騨農業協同組合白川支店(普) 9203800

現金書留による場合及び資料請求先

〒501-5627 岐阜県大野郡白川村荻町2495-3
(財)世界遺産白川郷合掌造り保存財団
TEL(05769)6-3111 FAX(05769)6-3113
☆インターネットでも受け付けています。
<http://shirakawa-go.org/kikin.html>

編集後記

平成23年3月11日に発生した東日本大震災とそれに続く福島第一原発事故は、それまで漫然と営まれてきた日常生活を一変させてしまいました。被災地の惨状を思うと、なにかを食べる度、また水道・電気を使う度にも、これは贅沢をしているのではないかと申し訳なく思うようになった人が増加しているそうです。当然、余暇を過ごすこと、旅行に出かけることに後ろめたさを感じる人も多いでしょう、それは震災以降の観光客数に如実に表れています。がらんとした駐車場を眺めていると、普段なら思いもしなかつたようなことが頭に浮かびます。果たして私たちの仕事って必要なことなのか。合掌造り集落を保存し、観光業を含めた地域の振興発展につなげていくこと、それが未曾有の大災害、山となった瓦礫の前ですべての価値が揺らいでしまいました。文化財を保存すること、文化を継承し未来へつなげていくこと、くじけそうになりながらもその意味を自問自答する必要があると思います。白川郷の合掌造り集落を培ってきた「結い」と呼ばれる相互扶助の精神、それは決して地域特有のものではありません。日本人が生きていく中で学んでいった知恵の結晶です。余っていたら必要とする人に与え、逆に足りないときには分けてもらう、個人の力には限界があるが大勢で取り組むことで労力が軽減される。今回の災害で日本人は特に意識することもなく、当たり前に行動しています。そういつた日本人の助け合いの心が今世界中から賞賛を浴びているのでしょうか。日本はかつて阪神大震災を乗り越えましたが、今回は時間をはかるかも知れませんが、必ず復興を成し遂げる、決して大上段に構えずとも、日本の文化が継承されていることを確信し、そう思う次第です。